

視点

森氏の女性差別発言の本質

同志社大学教授 岡野 八代



東京オリ・パラ組織委員会の森喜朗氏の「女性

がいると会議が長い」発言、どのように受け止められたでしょうか。この発言は、文化や政治体制を超えて人々が集う4年に一度の「平和の祭典」を開催する側の、いわば顔となる人物による女性差別発言で、だからこそ、日本に限らず世界から抗議の声が上がりました。しかし、ここでわたしが問いたいのは、この発言は日本の政治状況の何を露わにしたのかということです。

コロナ大感染の中で明らかになったのは、女性たちが多く引き受けている家事・育児・介護・看護はどのような状況であり、止めることができない不可欠(エッセンシャル)

的な営みであり、現在、コロナ感染の危機に直面しつつも、細心の注意を払い疲弊しながらもお、女性たちはその営みを背負い続けていることでした。他方で、大半は非正規労働に従事している女性たちは職を失いやすく、困窮しています。コロナ禍で自殺する女性も大幅に増えました。そうした女性たちの苦しみに、この1年、政治は手を差し伸べてきたでしょうか。昨年2月に前首相の決断によって突然出された小中高の一斉休校で、頭を抱えた保護者、特に母親はどれほどしたことでしょうか。そうした女性たちの姿が、正確に報道され社会問題化したでしょうか。

テレビでコロナを語る専門家はほぼ男性、政治解説者は例外なく男性、政府のコロナ感染症対策分科会も女性は少なく、女性たちと女性たちが日々関わる子どもや高齢者、障がい者、病人など

の声は、コロナ以前からこの国ではほとんどわたしたちの耳に届いてきませんでした。今から約30年前、アメ

女性の役割を軽視し恫喝 男中心の政治に怒り湧く

リカフェミニスト心理学者 ジーン・ベイカー・ミラー著 Yes, But... ーフェミニズム心理学をめぐって(2) 一冊が、

日本のフェミニスト・カウセリングの草分けである河野貴代美さんによって翻訳されました。それまで女性は、優柔不断で人の話に左右され判断力に劣ると心理学では評価されてきました。それに対して、ミラーは、夫婦のカウセリングを通じて、女性は男性に経済的に依存しているにもかかわらず、あるいはしているからこそ、夫の妻への対応とは異なり、妻は夫(と家族)に対する知識や想像力があり、変化を見逃さず、臨機応変に夫のニーズに答えていることを発見します。それは一方では、夫の気分を害して不機嫌になられたり、最悪暴力被害にあつたりもするからです。他方で、女性たちの気遣いは、広い文脈のなかで複眼的に——仕事でも家族への思いやりを忘れないなど——多様な事柄に気を配るといった積極的な能力として見直されました。ただ、経済的な効率が健全な男性たちの権力が中心の社会では、他者を育て、労り、慈しむといった能力は、母が

揮するのは当然だけれども、いちいちその労苦をねぎらったり、社会的に評価するまでもないと思われられてきたのです。森氏は問題の発言以前にも「コロナがどうあれオリンピックはやる」と豪語していました。そうした現政権のオリンピックに対する態度やコロナ対策に、女性たちは、自分たちがケアする人々の分まで言いたいことがたくさんあるはず。常に本人以上に家族のことを気遣い、その世話を担ってきたからこそ、コロナで苦しむ人々を見て見ぬふりをするような態度に黙っていられなくなるのではないのでしょうか。森発言は、それぞれの境遇に生きる、異なる人々の多様な意見に対する恫喝であり——黙って俺に従え!——、この発言を許すことは、今後も日本は一握りの権力者の思うままの政治を続けることになる。と皆が了解したからこそ、女性たちが怒りを露わにしたのでしよう。